

彩りのある生活空間を作りだす ①

前回までは、「介護食」や「食育」の普及に向けた様々な活動から、「食」を生きる可能性や意欲を育む手段として活用していくことの大切さを考えてみました。

今回から二回は「住」をテーマに、心理面に配慮した生活空間を提供していくために必要な事柄について考えます。今回は、「色彩NPO日本カラーネットワーク協会」の活動をご紹介しますながら、色彩の持つ意味とその効果的な活用について考えてみたいと思います。

色は心のメッセージ

東京渋谷区にある「色彩NPO日本カラーネットワーク協会」(以下、協会は、カラーコーディネーターや色彩を学ぶ方々が中心となり、平成十二年に、日本で最初の色彩NPOとして活動を開始しました。

「色彩の知識や技術を学ぶ人が多くなってきている中で、自分の習得したものを生かした活動の場が作れないか。そんな思いから、高齢者や障害者施設、不登校の子どもたちのフリースクールなどでの色彩ボランティア活動がスタートしました。色彩と心理を結び付けたこの活動では、普段疾病や障害によって、自分の思いを上手に伝えることが難しい方々に、様々な色のカラーカードを使ったゲームやイラストへの着色をしていただき、その時選びとった形や色を塗っていく様子から、心の状態や内面にある思いを汲み取ってあげ

られるよう努めます。この作品(三段目中央)は、半身麻痺のある高齢男性の作品です。この方は作品を作る際、大きい気球は息子が乗れるのだと話されていました。色の選択ははつきりしておりとても力強く色を塗られていましたが、最後まで小さい気球は着色されま



高齢者施設でのボランティア活動のようす。語り合い、よりそいながら1つ1つ色を選んでいく

せんでした。施設に来られてからほとんど面会に来ることのない息子さんを、どの色で表現すればいいのか迷ったからではないでしょうか。大きい気球の上部に塗られた『不安』や『迷い』をイメージする紫色からそんな気持ちを読み取ることができません。それでも、その紫色を小さい気球の方に塗り伸ばし、二つの気球につながりを持たせることで、『一緒に飛んで行くのだ』と話されていたのが印象



大きい気球の右上にはみ出している色は紫色。色を塗れない小さい気球に塗り伸ばされている

的でした。色彩ボランティアでは、そんな一人ひとりの気持ちに添ってあげられるような活動をしていきたいと考えています」と、協会副理事長の須貝ミサオさんは話します。

色は環境をひびく

協会では、色彩心理を応用して福祉施設の環境整備や、バリアフリー商品などの開発に向けた、色彩提

案も行っています。

協会理事長のヨシタミチコさんは、「環境の中にある色を一つひとつの点で見えていくのではなく、全体的な面で見るといっていいながら色彩を提案していきます。特に、福祉施設の場合、入所されている方が過ごす空間は生活に邪魔にならないよう無意識に感じられる色を。

一方、通所で利用される方が過ごす空間では、日常から離れて気分転換することができるよう、明るく楽しいと感じられる色をご提案します。また、西日が強い場所への暖色の配置を避ける、地域の景観に配慮した外観を考えていくなど、建物の構造や地域性などを配慮した色選びを心がけています。

先日、高齢者施設の電話コーナーの色彩をご提案させていただきましたが、まず考えたのは、高齢者の方々がどんな時に電話を利用されるかということでした。住み慣れた地域や家族から離れて生活する方々の多くは、どちらかというと楽しいことではなく、寂しさや不安な気持ちを癒そうと受話器を取るのではないかと。そう考えた私たちは、少しでも気分が和らぐよう、壁の色をポップで楽しい色にするという逆の仕掛けを試してみたところ、利用者の方にとっても好評だということです。このように